

当センターにおける長期入院症例の検討

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅
ケアシステムに関する研究)

研究協力者 山 田 多佳子

要約：当センターにおける長期入院(90-179日)の90%は極小未熟児であるが、180日以上在院例の40%は先天異常が占めており、これらの症例に対する医療についての見直しが必要と考えられる。

見出し語：長期入院、極小未熟児、先天異常

研究方法：1984年10月-1989年9月の5年間に当センターに入院した新生児1576名について、入院期間が90-179日(A群)及び、180日以上(B群)の症例の原因疾患及び転帰について検討した。

結果：A群は87名(5.5%)、B群は19名(1.2%)であった。原因疾患はA群では、超未熟児63名(72.4%)、極小未熟児15名(17.2%)、先天異常6名(6.9%)、低出生体重児、重症仮死、重症感染症各1名(1.1%)であるのに対し、B群では、超未熟児10名(52.6%)先天異常7名(36.8%)、重症仮死1名(5.3%)であった。転帰については、全体で6例が死亡、8例が転科又は転院、1990年2月現在も入院中の症例が3例、在宅人工換気施行1例残り88例はすべて軽快退院した。超未熟児についてみると、5年間の入院総数93名中、死亡した17名を除く76名のうち、入院期間が90日未満の症例は4例、

180以上の症例は10例で、62名は90-179日の間に軽快退院した。在胎週数でみると、28週未満の症例69名中の生存例57名は、1名を除き56名が90日以上長期入院例であった。

考察：当センターにおける長期入院例の大半は超未熟児、極小未熟児等未熟性に起因する症例で占められている。しかし、超未熟児の87%は180日未満の入院期間後、軽快退院し、180日以上入院を必要とする症例は、ヒルシュスブルグ病、ファロー四徴症、ソケイヘルニアのかんとん、声門下狭窄等の合併症を有する超未熟児であった。一方、染色体異常、中枢神経系奇形、ミオパチー等の先天異常で長期入院となった13名の半数は180日以上在院し、B群に占める割合は37%と相対的に高くなっている。このことは、ある程度の時間をかければ、大部分が軽快退院する可能性の高い未熟児に比べ、医療技術の発達によって長期生存は可能となっ

たものの、現在の医療レベルでは治療方法のない先天異常の症例がNICUに累積的に増加していくことを示唆している。そういった症例の人工換気が増加すれば、身動きがとれないNICUも発生しうる。すべての人間の生命の貴重さは平等であるという大前提を前にして、限られたスペース、機器、人員の中で、ジレンマに悩む新生児医療従事者も少なくない。新生児医療が、生後間もない新生児のための医療を十分行なうためという理由とは別に、たとえ治療不可能な重度の障害をもっていたとしても、彼等とその家族が、満足できる生涯を送るために、

現在の新生児施設、重度心身障害児施設とは別の施設（例えば新生児ホスピス）が必要であり、あるいは、時に彼等が家族の一員として、在宅でも安心して過ごせるような地域全体のシステムを作るべきであろう。そのためには、在宅で彼等が家族だけの負担とならないような訪問看護体制、緊急事態に対処できる家庭医、地域病院との連携、そして何より、社会全体が単に健康者の都合だけで動くのではなく、老人、身障者を含めた人々とともに生きていくことを当り前とするような意識をもつことが重要であろう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:当センターにおける長期入院(90-179 日)の 90%は極小未熟児であるが、180 日以上の在院例の 40%は先天異常が占めており、これらの症例に対する医療についての見直しが必要と考えられる。